

## 胃平滑筋肉腫の1例

宮川 信 宮崎 忠昭

信州大学医学部 丸田外科教室

## A Case of Leiomyosarcoma of the Stomach

Makoto MIYAKAWA and Tadaaki MIYAZAKI

Prof. MARUTA'S Surgical Clinic, Shinshu University

我々は噴門癌を思わせる胃内発育型平滑筋肉腫を経験したので、この症例を報告すると共に、胃肉腫、とくに胃平滑筋肉腫について若干の考察を加える。

## I 症 例

中野 某 54才 女性

主訴：心窩部の不快感。

家族歴～既往歴：特記すべきことなし。

現病歴：15～16年前より食後2～3時間して胸やけ、心窩部痛があり、その都度内服薬を用いていた。1965年に入り嘔気を覚えるようになった。同年5～6月頃より嘔気が増強し、同時に食事に際して前胸部の狭窄感、心窩部の不快感等を訴えるようになり、また全身倦怠感、るいそうが強くなったので、当科に受診、同年10月29日入院した。

入院時所見：体格中等度、栄養やム不良。眼瞼結膜に貧血を認める。鎖骨上窩、頸部、腋窩リンパ節腫脹は認めない。胸部は打聴診、レ線像共に異常なし。腹部は平坦で腫脹は触知せず、腹水蠕動不穏も認めない。

## 臨床検査成績：

血液像・赤血球数 $282 \times 10^4$ 、白血球数4300、血色素(ザーリ)54%と高度の貧血を認めた。

尿検査・異常なし。

糞便潜血反応・陽性。

肝機能検査・異常なし。

胃液検査・噴門部に狭窄があって胃ゾンデの挿入が不能であったため測定不能。

胃レ線検査：噴門部に陰影欠損像を認めたが(写真1)、気腹を行ない、立位で再透視を行なった所(写真2)食道、横隔膜への浸潤は認められなかった。

以上の所見より噴門癌と診断した。

手術所見：上腹部正中切開にて開腹すると、鶯卵大の腫瘍は噴門部にあつて、後壁から大彎側にまで及んでいる。漿膜への浸潤はなく、周囲の臓器並びに横隔膜との癒着は認められなかった。しかし左胃動脈近旁

リンパ節に転移を認めた。噴門癌の診断のもとに胃全別を行ない、Roux法による食道空腸吻合を施行した。

別出標本の肉眼的所見：腫瘍は噴門部より穹窿部にかけて存在し、鶯卵大で白色を呈しており、中心部は壊死に陥りいわゆる噴火口状潰瘍を形成していた。周囲の粘膜は萎縮性で、胃炎の像を呈していた(写真3, 4)。

病理組織所見：一様に規則正しく柵状に配列した良性の平滑筋腫の一部に橢円形または紡錘形のクロマチンに富む核を持った異型の著しい細胞よりなる平滑筋肉腫の像を認めた(写真5, 6)。また左胃動脈近旁リンパ節に転移が認められた。

術後経過：術後は食欲も良好となり、体重の増加も見ており、術後2年9カ月の現在再発の徴候なく健在である。

## II 考 按

## 1. 発生頻度

最近、胃肉腫に関する報告が比較的多く見られるようになって来たが、胃平滑筋肉腫の発生頻度は胃の悪性腫瘍中1%内外と思われる。胃平滑筋肉腫に関する主な報告では、Balfour and Mc Cann<sup>1)</sup>は胃悪性腫瘍4159例中47例、1.1%、Marshall<sup>2)</sup>は1171例中9例、0.7%、Pridgen<sup>3)</sup>は400例中13例、3.2%、Ochsner<sup>4)</sup>は2.0%、Berg<sup>5)</sup>は1.3%、Thorbjarnarson<sup>6)</sup>は1.3%、Rabinovitch<sup>7)</sup>は0.2%、石合<sup>8)</sup>は0.5%と報告し、その頻度はまちまちである。

我が国における胃肉腫の報告は明治33年今が円形細胞肉腫の2例を発表して以来100余例にのぼっているが、胃平滑筋肉腫はそのうち25例内外であるという<sup>9)</sup>。

胃肉腫における胃平滑筋肉腫の占める割合についてはPridgen<sup>3)</sup>は32例中13例、40%、Ochsner<sup>4)</sup>は胃肉腫17例中6例、35.4%、Giberson<sup>10)</sup>は25%、Jordan<sup>11)</sup>は28例中6例、21.4%、Trimble<sup>12)</sup>は20例中8例、40%、

Thorbjarnarson<sup>6)</sup>は50例中11例、22%と報告し、全体的に20~30%の割合のように思われる。丸田外科においては、昭和27年4月から昭和42年3月迄の15年間に胃悪性腫瘍の手術562例中1例である。

## 2. 発生部位

胃を上部(噴門部及び体上部)、中部(体中部及び下部)、下部(幽門前庭部)に分ければ胃癌が下部に多い<sup>13)</sup>のと異なり、胃肉腫は中部に多く発生するようである<sup>3)7)8)10)13)14)</sup>。しかし、胃平滑筋肉腫は著者らの症例の如く上部に多く発生する傾向があるという人もある<sup>15)</sup>。

前壁と後壁とでは梶谷<sup>13)</sup>は前壁に多く見られると報告しており、Giberson<sup>10)</sup>も40例中前壁24例、後壁16例と述べている。しかし石合<sup>8)</sup>は後壁にやゝ多く発生すると報告している。すなわち前壁、後壁ともにいずれの部位にも発生するものと思われる。大彎側、小彎側の別では、Marshall<sup>2)</sup>、Pridgen<sup>3)</sup>、Trimble<sup>12)</sup>らはその発生に於て差がないと報告しているが、一般に大彎側に多く発生すると述べている者もある<sup>15)16)17)</sup>。しかしRabinovitch<sup>7)</sup>は逆に小彎側に多いと報告している。著者らの胃平滑筋肉腫の発生部位は噴門部であった。

## 3. 年齢及び性別

胃肉腫の年齢別頻度では、いわゆる癌年齢といわれる40才~63才に最も多く発生すると思われるが、その平均年齢は41才<sup>2)</sup>、43才<sup>1)</sup>、53才<sup>3)</sup>、55才<sup>7)</sup>、64.5才<sup>3)</sup>、等と報告され、またGiberson<sup>10)</sup>は男性が46.5才、女性が45才で全体で45.7才と述べている。いずれにせよ癌の平均年齢よりやゝ若い年齢に発生しやすいようである。

性別頻度については欧米ではPridgen<sup>3)</sup>は男性5例、女性8例と女性に多いとしているが、男女同率であると報告するもの<sup>5)</sup>、或いは男性に多いと述べているものもある<sup>2)7)10)</sup>。本邦では男性対女性の比は新井<sup>18)</sup>は1.8:1、梶谷<sup>13)</sup>は2:1と述べ、性別については男性にやゝ多いようである。

## 4. 症 状

胃平滑筋肉腫の主な臨床症状は、上腹部痛、腹部腫瘍、消化管出血であると云われるが、本症に特有の症状ではない。上腹部痛は28%~75%にみられる<sup>3)4)5)10)</sup>。腹部腫瘍については、Giberson<sup>10)</sup>は胃平滑筋肉腫40例中12例、30%、Pridgen<sup>3)</sup>は46%、石合<sup>8)</sup>は胃肉腫16例中8例、50%に腫瘍を触知している。胃平滑筋肉腫は胃出血が多いとされている<sup>8)17)19)20)</sup>。すなわちOchsner<sup>4)</sup>は66.7%に大量の胃出血を認めており、またPridgen<sup>3)</sup>は50%、Giberson<sup>10)</sup>は47.5%に胃出血を見

ている。その他胃出血による貧血、消化不良、体重減少等があげられる<sup>11)10)</sup>。心窩部重圧感、膨満感、食欲減退などを訴える者もあるが、これらはいわゆる胃悪性腫瘍の症状とほぼ同一のものと思われる。著者らの症例における主訴は心窩部の不快感であった。

## 5. 発育形成

胃肉腫の発育形式については、Borrmann、Konjetzny、Schlesinger 等により<sup>21)22)</sup>、1)胃内型、2)胃外型、3)胃壁浸潤型の3型に大別されているが、梶谷<sup>13)</sup>は胃内及び胃壁浸潤型を追加して4型に分類している。本症は胃内発育型に属するものである。石合<sup>8)</sup>は胃内型が最も多いと報告しているが、梶谷<sup>13)</sup>は胃壁浸潤型が多く、ついで胃内及び胃壁浸潤型が多いと述べ、福重<sup>23)</sup>も胃肉腫59例の統計的観察において胃壁浸潤型が最も多いと報告している。

胃平滑筋肉腫の肉眼的所見で特徴的なものは灰白色の色調を示し、比較的限局し、硬度は弾性硬である。又2次的変化として粘膜炎に潰瘍形成を認めるが、これは腫瘍の肥大に伴い粘膜炎の緊張と血流の阻害に基づくもので、特に胃内発育に見られるという<sup>22)27)</sup>。

## 6. 診 断

報告例のなかには術前に肉腫と診断されたものもあるが、特有の症状がないため、ほとんどが胃痛と診断されている。Giberson<sup>10)</sup>によれば40例中6例が癌腫と診断され、本邦でも新井<sup>18)</sup>、長岡<sup>24)</sup>は脾腫と誤診した症例を報告している。さらに脾腫瘍、腎腫瘍、結腸腫瘍などと誤診されやすい<sup>1)</sup>。

Crile<sup>25)</sup>は若年者で上腹部に腫瘍の触知する場合は一応胃肉腫を考慮する必要があると主訴し、梶谷<sup>13)</sup>は著明な出血を伴う平滑筋肉腫の診断は必ずしも困難ではないと述べている。しかしMarshall<sup>2)</sup>は平滑筋肉腫9例の中で術前に4例を平滑筋腫、2例を良性腫瘍、3例を癌と誤診しており、又胃肉腫を肉腫と診断し得たのは41例中リンパ肉腫の1例のみで、2例において肉腫を想像していたが、38例は癌と誤診している。このように癌と誤診することが最も多いが、内視鏡、或いは細胞診の発達した現在では、その診断率は次第に向上していくものと思われる。

## 7. 治療及び予後

手術々式は大部分が通常の胃切除で目的を達すると云われているが、Jordan<sup>11)</sup>、Ochsner<sup>4)</sup>は胃全剝離をすすめている。著者らの症例は胃噴門部に驚愕大の腫瘍を形成していたため胃全剝離を施行した。

胃肉腫は胃癌に比して一般に経過が緩慢で、早期に根治手術を行なえば、胃癌よりも予後はやゝ良好であるが、これはリンパ節転移、遠隔転移の形成が胃癌よ

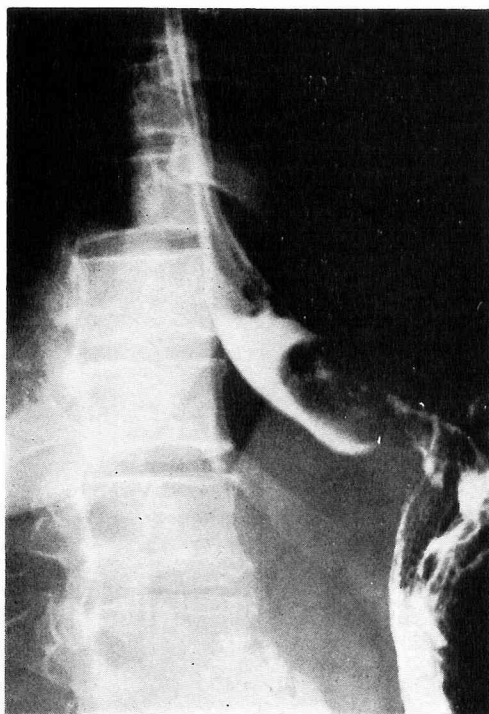


写真 1.

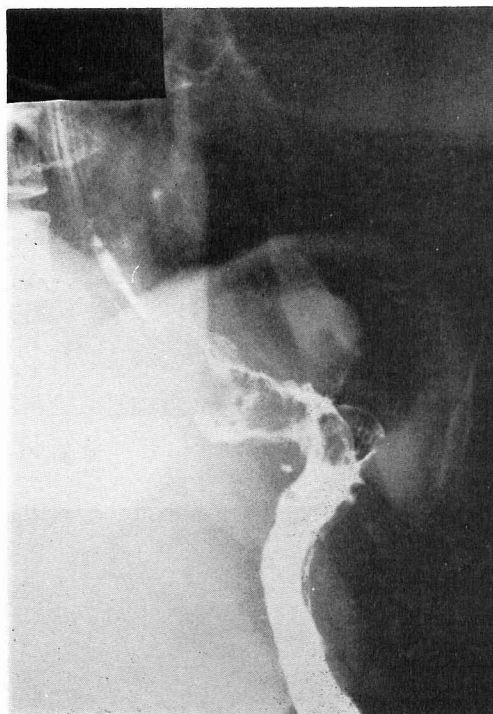


写真 2. 約1000cc気腹, 立位で撮影

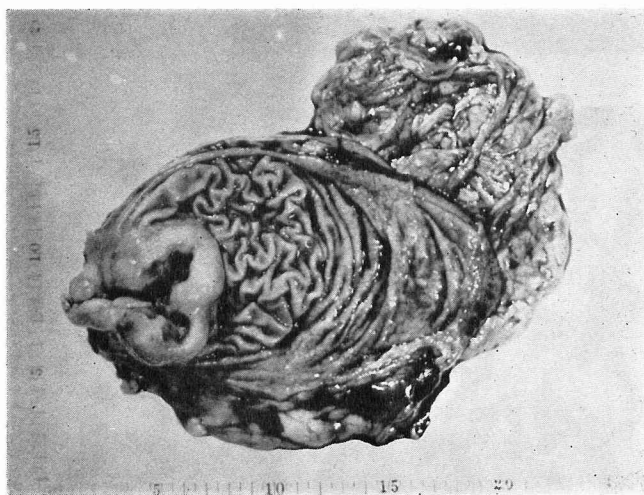


写真 3.

摘出胃：噴門部に腫瘤が認められる

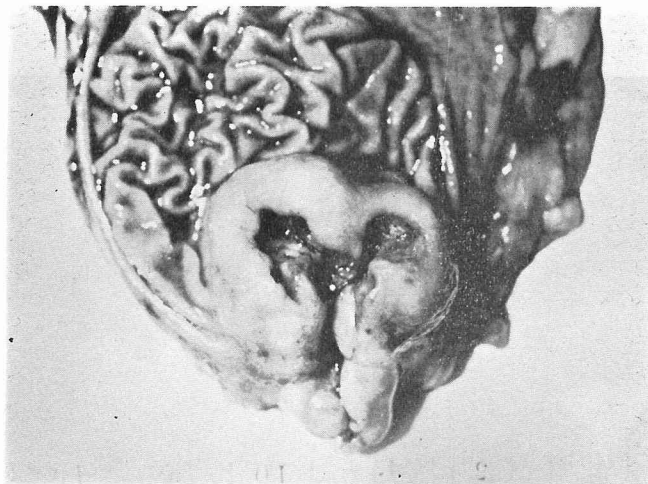


写真 4.

腫瘍の拡大した写真

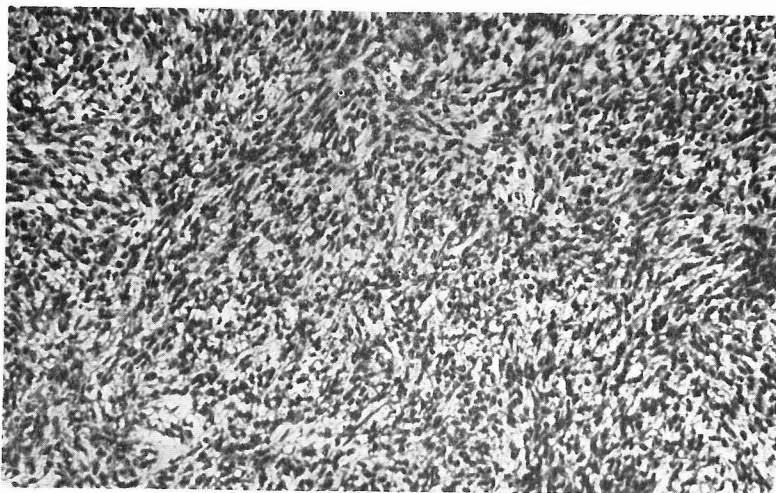


写真 5.

HE 100×

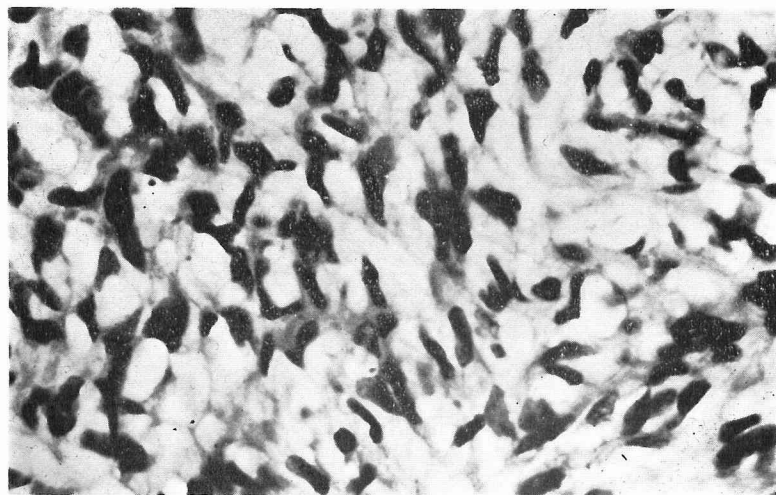


写真 6.

HE 400×

り遅く、また周囲臓器への浸潤が少ないためと考えられる<sup>22)</sup>。胃肉腫の5年生存率に関しては Marshall<sup>2)</sup>の42%、Jordan<sup>11)</sup>の42.6%、Thorbjarnarson<sup>6)</sup>の59%の報告がある。胃平滑筋肉腫のみについてみると Trimble<sup>12)</sup>は68%、Giberson<sup>10)</sup>は53.8%と報告し、胃肉腫のうちでも平滑筋肉腫は予後が比較的良好とされている<sup>6)8)</sup>。著者らの症例は2年9カ月を経過しているが健在である。

#### 8. 転 移

胃肉腫の転移は胃癌のそれに比して少なく、15%内外と報告している者もある<sup>27)28)</sup>。Marshall<sup>2)</sup>は平滑筋肉腫20例中リンパ節転移の証明されたものはなく、肝転移1例が認められたと報告し、Giberson<sup>10)</sup>も40例中リンパ節転移は1例もなく、肝転移は6例に見られたと述べている。梶谷<sup>13)</sup>は胃肉腫について、一般にリンパ節転移は少なく、主として肝転移であって、肝については大網、脾、脾の腫であると報告している。また転移の発育は一般に緩徐であると述べている。Berg<sup>5)</sup>は胃平滑筋肉腫24例で、大網及び後腹膜転移が6例、肝転移が3例、骨転移が2例、肺転移が1例であったと報告している。結局胃平滑筋肉腫は肝に最も多く転移を形成するものと考えられるが、著者らの症例ではリンパ節転移のみで肝転移はみられなかった。

#### 結 語

我々は54才の女性において胃癌の診断のもとに胃全剝を行なったところ、胃平滑筋肉腫であった1例を報告し、あわせて文献的考察を試みた。

#### ABSTRACT

A case of leiomyosarcoma was reported. The literature on this disease was cited and clinical appearances, age and sex incidence, diagnosis, treatment and prognosis were discussed.

#### 文 献

- 1) Balfour, D. C. and Mc Cann, J. C. : Sarcoma of the Stomach, Surg. Gynec. & Obst., 50 : 948, 1930.
- 2) Marshall, S. F. : Sarcoma of the Stomach, Ann. Surg., 131 : 824, 1950.
- 3) Pridgen, J. E. : Leiomyosarcoma of the Stomach, Ann. Surg., 153 : 971, 1961.
- 4) Ochsner, S. : Sarcoma of the Stomach, Ann. Surg., 142 : 804, 1955.
- 5) Berg, J. : Leiomyosarcoma of the Stomach, Cancer, 13 : 25, 1960.
- 6) Thorbjarnarson, B. : Sarcoma of the Stomach, Amer. J. Surg., 97 : 36, 1959.
- 7) Rabinovitch, J. : Sarcoma of the Stomach, Amer. J. Surg., 80 : 550, 1950.
- 8) 石合省三 : 原発性胃肉腫について, 外科, 26 : 421, 昭39.
- 9) 岡野 繁 : 胃潰瘍および胃ポリープを伴った胃外発育性平滑筋肉腫の1例, 外科診療, 6 : 2, 199, 昭39より引用.
- 10) Giberson, R. G. : Leiomyosarcoma of the Stomach, Surg. Gynec. & Obst., 98 : 186, 1954.
- 11) Jordan, G. L. : Sarcoma of the Stomach, Surg. Gynec. & Obst., 100 : 453, 1955.
- 12) Trimble, I. R. : Sarcoma of the Stomach, Surg. Gynec. & Obst. 110 : 437, 1960.
- 13) 梶谷 鑣・渡辺 弘 : 原発性胃肉腫について, 癌の臨床, 6 : 141, 1960.
- 14) 木本誠二 : 胃の肉腫, 外科診療, 4 : 11, 1430, 昭37.
- 15) 篠田正昭 : 胃肉腫の2例, 外科, 28 : 871, 昭41.
- 16) 工藤武彦 : 胃肉腫の1治験例, 外科, 27 : 746, 昭40.
- 17) 竹内藤吉 : 原発性胃肉腫の2例, 外科, 27 : 1339, 昭40.
- 18) 新井満夫 : 脾腫と誤られた胃外発育型胃肉腫2例, 臨床消化器病学, 5 : 43, 1956.
- 19) 岡野 繁 : 胃潰瘍および胃ポリープを伴った胃外発育性平滑筋肉腫の1例, 外科診療, 6 : 2, 199, 昭39.
- 20) 田村暢男 : 胃平滑筋肉腫の手術症例, 横浜医学, 17 : 289, 昭41.
- 21) 武藤完雄監修 : 新外科各論, 下巻, p. 181, 昭39, 金原出版株式会社.
- 22) 豊島純三郎 : 胃と回腸に発生した平滑筋肉腫の2治験例について, 臨床外科, 20 : 1259, 1965.
- 23) 福重 悟 : 原発性胃肉腫の1例, 外科, 15 : 351, 昭28.
- 24) 長岡 謙 : 脾腫と誤診した胃外型平滑筋肉腫の一例, 東北医誌, 74 : 152, 昭41.
- 25) Crile, G., Jr. : Primary Lymphosarcoma of the Stomach, Ann. Surg., 135 : 39, 1952.
- 26) 星野智雄 : 胃癌の姑息手術について, 癌の臨床, 4 : 423, 昭33.
- 27) Conly, R. H. : Sarcoma of the Stomach, Amer. J. Clin. Path., 19 : 966, 1949.
- 28) Schindler, A. B. : Leiomyosarcoma of the Stomach, Surg. Gynec. & Obst., 82 : 239, 1946.